３　調査収集データの概要

１）文書料紙原本調査データ

Ⅱ章の２節で説明した文書料紙原本調査については、表１（10ページ）のような調査票でもって調査を行い、 2,833件のデータを採取したことは先に述べたとおりである。これらの調査票のデータは、同章の６節で説明したように、データ・ベース・ソフト「桐」を用い、表２（15ページ）に示したような定義でパソコンに入力した。その結果の主要な部分は、この章のデータ編に紹介してある。ここでは、このデータの示す意味について、多少説明を加えておきたい。

これらのデータは、項目数が 100余件に及ぶものである。したがって、帳票形式でプリント・アウトした場合には、表３（18ページ）のように１件で１ページを費やし、全データを紹介するとなると、その件数分のページ数を必要とする。また、帳票形式ではデータの比較が分り難い恨みがある。データの比較となると、やはり表形式ということになるが、これも項目数 100余件となると、１件のデータが長すぎ到底１行には収らず、10数行になるから、これもデータの比較に適さない。

そこで、この研究グループとしては、これらの項目のうち成果が出たと思われる項目を選び、Ａ・Ｂの２つの表に分割して紹介することとした。Ａ表は、主として料紙の厚さ・寸法・重さ等の計測および計算のデータであり、客観的な数値を主体に構成した。Ｂ表は、主として品質・地色・墨乗・簀目・糸目・板目・刷毛目・漉斑等の紙質・紙面の状態のデータであり、どちらかというと主観的な判断が大きな比重を占める項目を主体に構成している。

以下、Ａ表・Ｂ表の項目について、概略説明を加える。

Ａ表　史　料　名：データの文書が属する文書群の名称。略称で示したが、正式名称は次の通りである。

東寺（東寺百合文書）　東大（東大寺文書）　上杉（上杉家文書）
久我（久我家文書）　大友（大友家文書）　阿蘇（阿蘇神社文書）
法勝（法勝寺御八講問答記紙背）　最勝（最勝寺講問答記紙背）

年　　号：文書の日付のうち年号のみを表示した。

書写　年代：文書が案文の場合、書写された推定年代。無年号文書の場合、文書が作成された推定年代。年代区分は次の通り。

平　安（平安時代 794～1085）　院　政（院政時代1086～1185）
鎌　倉（鎌倉時代1186～1333）　南北朝（南北朝時代1334～1392）
室　町（室町時代1393～1493）　戦　国（戦国時代1394～1567）

織豊期（織豊時代1568～1600）　　江　戸（江戸時代1601～1868）

文　書　名：当該料紙に書かれている文書の名称。できるだけ簡略化した。

正　　案：正文・案文・土代等の別。

様　　式：下文系文書と書札系文書の別。

形　　状：竪紙・折紙・切紙・続紙等の別。

部　　分：書札系文書の場合、本紙・裏紙・礼紙・懸紙の別。

材　　質：楮紙・斐紙・宿紙の別。（）内は、楮紙ならば、檀紙・引合・杉原紙奉書紙等の別。斐紙ならば、鳥の子・その他の別。

厚さ　平均：調査票の「厚さ」欄20箇所の数値の計算平均値。単位は 1/100mm。

厚　　階：厚さ平均の３階層ランク。下欄（）内の単位は 1/100mm。
厚（15.0以上）中（15.0未満～ 7.0以上）薄（ 7.0未満）。

厚差最大値：調査票の「厚さ」欄20箇所の数値のうちの最大値と最小値との差。単位は 1/100mm。

厚差偏差値：調査票の「厚さ」欄20箇所の数値の偏差値。紙の凸凹の度合を見る。単位は 1/100mm。

偏　　階：厚差偏差値の３階層ランク。下欄（）内の単位は 1/100mm。
粗（ 3.5以上）中（ 3.5未満～ 2.0以上）精（ 2.0未満）。

縦　寸　法：料紙の天地の寸法。単位はmm。

縦　　階：縦寸法の３階層ランク。下欄（）内の単位はcm。
長（30.0以上）中（30.0未満～25.0以上）短（25.0未満）。

横　寸　法：料紙の左右（端奥の間）の寸法。単位はmm。

横　　階：横寸法の３階層ランク。下欄（）内の単位はcm。
長（48.0以上）中（48.0未満～46.0以上）短（46.0未満）。

縦　横　比：横寸法を縦寸法で割った数値。単位は倍。

比　　階：縦横比の３階層ランク。下欄（）内の単位は倍。
長（48／28以上）中（48／28未満～42／28以上）短（42／28未満）。

面　　積：横寸法に縦寸法を掛けた数値。単位はcm^2。

面　　階：面積の３階層ランク。下欄（）内の単位はcm^2。
大（48×30以上）中（48×30未満～45×25以上）小（45×25未満）。

重　　さ：料紙の重量。単位は1/10ｇ。

重　　階：重さの３階層ランク。下欄（）内の単位は1/10ｇ。
重（80.0以上）中（80.0未満～50.0以上）軽（50.0未満）。

面　密　度：重さを面積で割り、その商を 100,000倍した数値。1㎡当たりの重さ。単位はg/㎡。

粗　　階：面密度の３階層ランク。下欄（）内の単位はg/㎡。

重（55以上）中（55未満～35以上）軽（35未満）。

体　密　度：重さを体積（面積×厚さ）で割り、その商を 1,000,000倍した数値。
１㎡の面積で厚さ1/10㎜の紙に換算したｇ単位の重さ。
単位は10,000ｇ／m^3。

密　　階：体密度の３階層ランク。下欄（）内の単位は10,000ｇ／m^3。
重（35以上）中（35未満～25以上）軽（25未満）。

Ｂ表　品　　質：紙質の３階層ランク。調査担当者の主観により上・中・下を判断。

地　　色：紙面の色を白色・黄色・褐色およびその近辺の色で表現。

墨　　乗：墨の乗り具合の良い・普通・悪いの３階層ランク。

太　簀　目：紙面に残った簀のヒゴの跡の太さを、調査担当者の主観により太い・細いの２階層ランクを判断。

簀視１　目：紙面を透かさない時の簀の目の目立ち具合。顕著・僅か・不詳の３階層ランク。

簀視２　目：紙面を透かした時の簀の目の目立ち具合。透視・微か・不詳の３階層ランク。

簀　　数：１寸当たりの簀のヒゴの本数。単位は本。

簀　　階：簀数の３階層ランク。下欄（）内の単位は本。
多（18以上）中（18未満～14以上）少（14未満）。

太　糸　目：紙面に残った簀の糸の跡の太さを、調査担当者の主観により太い・細いの２階層ランクを判断。

糸視１　目：紙面を透かさない時の糸目の目立ち具合。顕著・僅か・不詳の３階層ランク。

糸視２　目：紙面を透かした時の糸の目の目立ち具合。透視・微か・不詳の３階層ランク。

糸　　巾：糸目と糸目の間の巾（距離）の平均値。単位はcm。

糸　　階：糸巾の３階層ランク。下欄（）内の単位はcm。
広（ 3.5以上）中（ 3.5未満～ 2.5以上）狭（ 2.5未満）。

板　　目：板目の有無。ある場合は、（）内に板目のある紙面は表か裏か。あるいは板目の目立ち具合は顕著か微かかを表示。

刷　　目：刷毛目の有無。ある場合は、（）内に刷毛目のある紙面は表か裏か。あるいは刷毛目の目立ち具合は顕著か微かかを表示。

漉　　斑：漉斑の有無。ある場合は、（）内に漉斑の目立ち具合は顕著・普通・微かの３階層ランクを表示。

（Ｂ表の史料名・年号・書写年代・正案・様式・形状・部分・材質の項目は、Ａ表を参照。紙巾の関係で、Ｂ表の文書名の項目は省略した。Ａ表とＢ表の番号は共

通だから、文書名を知りたい時は番号照合によりＡ表から引くことができる。）

Ａ表・Ｂ表それぞれの項目の説明は、以上の通りであるが、このうち厚階・偏階・縦階・横階・比階・面階・重階・粗階・密階および簀階・糸階は、初めのコンピュータ入力の際には項目設定をしていなかったものである。これらは、今回このデータを報告書に掲載・紹介するに当たって、データを見やすくするため新たに設けてみたものである。なお、今回これらのデータを紹介するに当たって、検討した結果、不十分なデータの調査票も少なくなかった。これらはもう少し再検討をしてみたいので、今回は、これを除いて掲載することを了承いただきたい。今回の報告書に掲載できる点数は、 いろいろ点検してみたところ1,870点となった。

それでは、以下に、これらのＡ表・Ｂ表から明らかになったことを簡単に説明しておきたい。まず、Ａ表の結果から述べる。次の表６は、厚階・偏階・縦階・横階・比階・面階・重階・粗階・密階について、平安・院政・鎌倉・南北朝・室町・戦国・織豊期・江戸の時代別、かつそれぞれの３階層ランク別の件数を表示したものである。厚階・偏階・縦階・横階・比階・面階・重階・粗階・密階の項目については、この表では、それぞれ「厚さ平均」「厚差偏差値」「縦寸法」「横寸法」「寸法比率」「面積」「重さ」「面密度」「体密度」と項目名を表記し直し、それぞれをさらに３階層分類欄に分けてある。表７は、表６の結果を項目別・時代別の組合わせ毎に、３階層についての百分率の割合を出したものである。ところが、これらのデータの中には切紙の文書も含んでいるので、縦階・横階・比階・面階・重階の項目については、これらの切紙文書を除外しないと、比較が不正確となる。そのため、これらの項目について切紙文書を除外し再度集計し直したものが、表８である。表９は、やはり表７と同じ様に、表８の項目別・時代別の組合わせ毎に、３階層についての百分率の割合を出したものである。

紙の厚さの時代的変遷は、「厚さ平均」の集計結果に顕れているようである。表７の当該欄に見えるように、平安期は調査データ件数ののうち中ランクが最も多く、59.6％を占める。次いで、院政期には厚ランクが最も多く52.1％、鎌倉期には厚ランクが65.7％となり、厚さは頂点に達する。その後、南北朝期には厚ランクが50.2％と下がり、室町期には中ランクが最も多く64.6％に達する。その後、戦国期に中ランクが48.9％と下がるが、織豊期には厚ランク46.2％中ランク50.0％と南北朝期に近い割合に戻るが、江戸期には中ランクが66.0とほぼ室町期を少し上回る程度に下がるようである。以上を纏めると、文書料紙の厚さは少し厚めの平安期からさらに厚くなり出し、鎌倉期に大きなピークを迎える。その後、だんだん薄くなっていき、戦国期が最も薄い谷となる。織豊期に急に第２のピークとなり、南北朝期程に回復し、鎌倉期に迫るが、江戸期には室町期並みに戻るのである。鎌倉期のピークは、おそらく檀紙の大型化に伴い厚みも増したものと考えられよう。室町期は杉原紙の流行で厚みが減じ、戦国期も鳥の子の出現をみるものの、杉原紙が盛行することには変りがなかった。織豊期・江戸期ついてはデータの絶対数が少ないのでもっと調

表６　文書料紙調査　時代別データ（実数）
（切紙を含む）

	厚さ平均			厚差偏差値			縦寸法			横寸法			寸法比率		
	厚	中	薄	精	中	粗	長	中	短	長	中	短	長	中	短
平安	22	34	1	14	40	3	43	13	5	35	9	17	20	24	17
院政	75	69	0	60	65	19	137	23	6	143	10	13	65	91	10
鎌倉	282	130	17	157	80	192	269	141	26	246	26	164	22	259	155
南北朝	103	93	9	93	77	35	158	53	15	132	20	74	5	140	81
室町	61	188	42	229	54	8	59	173	65	70	102	125	39	212	46
戦国	78	158	87	240	67	16	72	60	185	86	72	159	141	82	94
織豊期	24	26	2	35	7	10	11	20	24	8	12	35	17	24	14
江戸	17	33	0	28	22	0	39	4	7	34	6	10	5	17	28

	面積			重さ			面密度			体密度		
	大	中	小	重	中	軽	重	中	軽	重	中	軽
平安	37	15	9	20	13	17	16	24	10	16	29	5
院政	143	16	7	19	49	7	12	58	3	32	36	5
鎌倉	248	109	79	170	58	94	164	87	64	109	154	52
南北朝	144	41	41	67	82	44	53	104	32	57	89	43
室町	51	172	74	23	44	213	28	61	189	72	96	110
戦国	54	72	191	60	56	193	109	110	83	199	69	34
織豊期	9	18	28	13	11	27	20	17	13	22	13	15
江戸	39	4	7	19	19	11	12	24	13	9	32	8

表７　文書料紙調査　時代別データ（比率）
（切紙を含む）

	厚さ平均			厚差偏差値			縦寸法			横寸法			寸法比率		
	厚	中	薄	精	中	粗	長	中	短	長	中	短	長	中	短
平安	38.6	59.6	1.8	24.6	70.2	5.3	70.5	21.3	8.2	57.4	14.8	27.9	32.8	39.3	27.9
院政	52.1	47.9	0.0	41.7	45.1	13.2	82.5	13.9	3.6	86.1	6.0	7.8	39.2	54.8	6.0
鎌倉	65.7	30.3	4.0	36.6	18.6	44.8	61.7	32.3	6.0	56.4	6.0	37.6	5.0	59.4	35.6
南北朝	50.2	45.4	4.4	45.4	37.6	17.1	69.9	23.5	6.6	58.4	8.8	32.7	2.2	61.9	35.8
室町	21.0	64.6	14.4	78.7	18.6	2.7	19.9	58.2	21.9	23.6	34.3	42.1	13.1	71.4	15.5
戦国	24.1	48.9	26.9	74.3	20.7	5.0	22.7	18.9	58.4	27.1	22.7	50.2	44.5	25.9	29.7
織豊期	46.2	50.0	3.8	67.3	13.5	19.2	20.0	36.4	43.6	14.5	21.8	63.6	30.9	43.6	25.5
江戸	34.0	66.0	0.0	56.0	44.0	0.0	78.0	8.0	14.0	68.0	12.0	20.0	10.0	34.0	56.0

	面積			重さ			面密度			体密度		
	大	中	小	重	中	軽	重	中	軽	重	中	軽
平安	60.7	24.6	14.8	40.0	26.0	34.0	32.0	48.0	20.0	32.0	58.0	10.0
院政	86.1	9.6	4.2	25.3	65.3	9.3	16.4	79.5	4.1	43.8	49.3	6.8
鎌倉	56.9	25.0	18.1	52.8	18.0	29.2	52.1	27.6	20.3	34.6	48.9	16.5
南北朝	63.7	18.1	18.1	34.7	42.5	22.8	28.0	55.0	16.9	30.2	47.1	22.8
室町	17.2	57.9	24.9	8.2	15.7	76.1	10.1	21.9	68.0	25.9	34.5	39.6
戦国	17.0	22.7	60.3	19.4	18.1	62.5	36.1	36.4	27.5	65.9	22.8	11.3
織豊期	16.4	32.7	50.9	25.5	21.6	52.9	40.0	34.0	26.0	44.0	26.0	30.0
江戸	78.0	8.0	14.0	38.8	38.8	22.4	24.5	49.0	26.5	18.4	65.3	16.3

表８　文書料紙調査　時代別データ（実数）
（切紙を除く）

除切紙	縦寸法			横寸法			寸法比率			面積			重さ		
	長	中	短	長	中	短	長	中	短	大	中	小	重	中	軽
平安	43	13	4	35	9	16	20	24	16	37	15	8	20	13	16
院政	137	23	4	143	10	11	65	91	8	143	16	5	19	49	5
鎌倉	268	141	25	246	26	162	22	258	154	248	109	77	170	58	94
南北朝	158	53	11	132	20	70	3	139	80	144	41	37	67	82	40
室町	58	170	31	63	99	97	17	203	39	51	170	38	22	42	184
戦国	70	60	19	40	54	55	9	68	72	53	67	29	53	39	54
織豊期	10	19	9	3	11	24	2	23	13	9	17	12	12	6	16
江戸	39	4	6	33	6	10	4	17	28	39	4	6	19	18	11

表９　文書料紙調査　時代別データ（比率）
（切紙を除く）

	縦寸法			横寸法			寸法比率			面積			重さ		
	長	中	短	長	中	短	長	中	短	大	中	小	重	中	軽
平安	71.7	21.7	6.7	58.3	15.0	26.7	33.3	40.0	26.7	61.7	25.0	13.3	40.8	26.5	32.7
院政	83.5	14.0	2.4	87.2	6.1	6.7	39.6	55.5	4.9	87.2	9.8	3.0	26.0	67.1	6.8
鎌倉	61.8	32.5	5.8	56.7	6.0	37.3	5.1	59.4	35.5	57.1	25.1	17.7	52.8	18.0	29.2
南北朝	71.2	23.9	5.0	59.5	9.0	31.5	1.4	62.6	36.0	64.9	18.5	16.7	35.4	43.4	21.2
室町	22.4	65.6	12.0	24.3	38.2	37.5	6.6	78.4	15.1	19.7	65.6	14.7	8.9	16.9	74.2
戦国	47.0	40.3	12.8	26.8	36.2	36.9	6.0	45.6	48.3	35.6	45.0	19.5	36.3	26.7	37.0
織豊期	26.3	50.0	23.7	7.9	28.9	63.2	5.3	60.5	34.2	23.7	44.7	31.6	35.3	17.6	47.1
江戸	79.6	8.2	12.2	67.3	12.2	20.4	8.2	34.7	57.1	79.6	8.2	12.2	39.6	37.5	22.9

査事例が増えた時点で考えてみたい。

表７の「厚差偏差値」の欄をみると、紙の凸凹具合の時代的変化が窺われる。平安期は精ランクが24.6％で中ランクが70.2％であったが、院政期から南北朝期までは精ランクが41.7％・36.6％・45.4と確実に凸凹が少なくなっていき、室町期から織豊期までは精ランクが78.7％・74.3％・67.3％と飛躍的に紙面の均等度が増していることがわかる。室町期以降はやはり杉原紙・鳥の子との関係あるいは流し漉きとの関係で考えるべきであろう。

紙の天地寸法の時代的変遷は、切紙を除いたデータで見ていかなければならないから、表９の「縦寸法」の集計がよく実態を表わしているだろう。これによると、文書の縦の高さは、平安期から南北朝期までが長のランクが71.7％・83.5％・61.8％・71.2％でいずれも長く、なかでも院政期がピークである。ところが、室町期以降織豊期までは、中ランクが65.6％・40.3％・50.0％と少し短くなる傾向が窺われる。このうちでも、戦国期には長ランクが47.0％と少し回復を見せている。紙の横寸法も、切紙を除いたデータで見たほうが良いから、表９の「横寸法」が実態に近いであろう。平安期から南北朝期までは長のランクが58.3％・87.2％・56.7％・59.5％と推移し、ピークは院政期であるがこの間を通して横の長い時代であった。ところが、室町期以降は中ランクが38.2％・36.2％・28.9％と中ランクにその中心が移り、織豊期では短ランクが63.2％に達する。室町期を画期に横巾がかなり短くなっていく様子がわかる。これも、杉原紙との関係が検討されなくてはならない。

縦と横の比率である「寸法比率」も、表９でみると、平安期から院政期が長ランク・中ランクがそれぞれ33.3％・40.0％と39.6％・55.5％であり、横に長めであったことがわかる。鎌倉以降、長ランクは極端に減り、中ランク・短ランクがそれぞれ59.4％・35.5％、62.6％・36.0％、78.4％・15.1％、45.6％・48.3％、60.5％・34.2％と推移する。鎌倉期・南北朝期は横寸法が比較的長かったものの、縦寸法も長くその比率が相対的に横が短めになったのであろう。室町期では中ランクに特化（78.4％）し、戦国期には短ランクが最も多くなる。時代がさがるに随い、確実に縦長めとなっていく様子がわかる。

面積は、表９の「面積」欄にその時代的推移が窺われる。平安期から南北朝期までは大ランクが主体で、61.7％・87.2％・57.1％・64.9％と料紙の大きな時代が続く。室町以降、中ランクに主体が移り、65.6％・45.0％・44.7％と推移する。戦国期に大ランクが35.6％で少し大きめとなるが大勢としては小さめとなっていくことがわかる。これも、杉原紙との関係が検討されなければならない。

重さについては、面積が大きいか、厚さが厚いか、紙が締まっているか、重い混ぜ物が含まれているか、等の要素でもって、いろいろかわってくる。表９の「重さ」欄をみると、かなりの激しい変動がみられる。平安以降の最も多いランクとその割合を列記すると、重40.8％・中67.1％・重52.8％・中43.4％・軽74.2％・軽37.0％・軽47.1％であり、乱高下している。しかし、趨勢は、だんだん軽くなっていく傾向がある。

重さは紙の大きさ・厚さに比例するから、その要素を捨象するため、密度を出した。重めの紙かどうかをみるには、表７の「体密度」欄がよく実態を示すものであろう。平安期から南北朝期までは、重ランク・中ランクを中心に推移して、それぞれ32.0％・58.0％、43.8％・49.3％、34.6％・48.9％、30.2％・47.1％で比較的重い。ところが、室町期には中ランク34.5％軽ランク39.6％と極端に軽くなる。続く戦国期・織豊期では、再び重ランク・中ランクを中心に移してそれぞれ44.5％・25.9％、30.9％・43.6％となる。戦国期は平安期から南北朝期まで非常に重くなっている。平安期から南北朝期までは、堅い紙が多かったであろうし、室町期は柔らかい紙が多かったのであろう。戦国期は鳥の子の影響であろうか。この他、添加物の問題も考えなければならない。今後の研究課題である。

次に、Ｂ表からわかる結果ついて、述べてみよう。「材質」は、これを判定することが本調査の最終的な目的でもあるのだが、それは総合判断として別に行う予定である。ここでは、調査担当者がどのような先入観で調査に当たっているか、というデータを示すに過ぎない。「品質」「墨乗」「漉斑」は、いずれも主観的判断に委ねられる部分が大きいだけに、かなり厳密な基準を設定しないかぎり、データにはなしえないことが判明した。「地色」「墨種」は、一定環境で数値的計測ができる器械の導入なしには不可能であることがわかった。「板目」「刷毛目」は、紙面の表・裏の表記が「文字面を表とする」という原則が徹底されなかったようで、データ相互に矛盾がみられる。部分的な見直しが必要なようである。

「太簀目」「太糸目」は、簀目・糸目の太さを主観的に判断したデータで、前者は「簀階」の結果によって主観の判断の確かさ・不確かさが検証される。後者は、結局ぼんやりした糸目跡か、はっきりした糸目跡か、の区分程度を表わすに過ぎないようである。結局のところ、これらのデータの採り方については、今後解決しなければならない問題が種々あることが判明した。その解決方法については、だいたいの見通しがついてとる。

しかし、「簀数」「糸巾」は、客観的な数値データであるので、この結果はこのまま使うことができる。「簀数」「糸巾」を基にして「簀階」「糸階」を作り、その時代的変遷を考えてみた。表10は、「簀階」「糸階」について、平安・院政・鎌倉・南北朝・室町・戦国・織豊期・江戸の時代別、かつそれぞれの３階層ランク別の件数を表示したものである。表11は、、表10の項目別・時代別の組合わせ毎に、３階層についての百分率の割合を出したものである。なお、これらの簀階・糸階は、表10・11では「簀目本数」「糸目巾」と項目名を表記し直し、それぞれをさらに３階層分類欄に分けてある。

文書料紙の簀目（簀のヒゴ跡）の本数は、１寸当たりの数であり、数が多いほどヒゴの太さが細いことになる。表11の「簀目本数」欄によれば、平安期・院政期・鎌倉期は中ランク・少ランクが多くそれぞれ64.4％・33.9％、54.7％・43.2％、64.9％・19.4％である。ところが、南北朝期以降は多ランク・中ランクが多くなりそれぞれ22.0％・62.8％、36.5％・52.9％、32.7％・35.8％、63.9％・22.2％であり、時代が降るにつれ簀のヒゴが細く

表10　文書料紙調査　時代別データ（実数）

	簀目本数			糸目巾		
	多	中	少	多	中	少
平安	1	38	20	22	27	1
院政	3	81	64	46	41	2
鎌倉	63	261	78	86	172	45
南北朝	48	137	33	41	56	88
室町	93	135	27	31	54	151
戦国	54	59	52	20	86	48
織豊期	23	8	5	6	19	4
江戸	8	22	17	24	12	2

表11　文書料紙調査　時代別データ（比率）

	簀目本数			糸目巾		
	多	中	少	多	中	少
平安	1.7	64.4	33.9	44.0	54.0	2.0
院政	2.0	54.7	43.2	51.7	46.1	2.2
鎌倉	15.7	64.9	19.4	28.4	56.8	14.9
南北朝	22.0	62.8	15.1	22.2	30.3	47.6
室町	36.5	52.9	10.6	13.1	22.9	64.0
戦国	32.7	35.8	31.5	13.0	55.8	31.2
織豊期	63.9	22.2	13.9	20.7	65.5	13.8
江戸	17.0	46.8	36.2	63.2	31.6	5.3

なっていく様子がわかる。特に室町期と織豊期の対前期比での増え方が顕著であり、この時期になんらかの抄造技術の改革があったように思える。簀のヒゴが細くなるということは、簀の目による凸凹の差がそれだけ少なくなることであり、またヒゴとヒゴの間も狭くなるだろうから、細かい繊維も漉き上げることができる。概して、平滑で繊維の細かい紙が漉かれるようになった事実を反映しているのではないかと思う。

次に、糸目と糸目の間隔である「糸目巾」を表11にみると、平安期から鎌倉期までは広ランクと中ランクが多く、それぞれ44.0％・54.0％、51.7％・46.1％、28.4％・56.8％とその巾は広いが、徐々に巾が狭まってきていることがわかる。南北朝期以降は中ランク・狭ランクが多くなり、それぞれ30.3％・47.6％、22.9％・64.0％、55.8％・31.2％、65.5％・13.8％と推移する。室町期に最も狭くなるが、その後は、鎌倉期の水準まで再び広がっていくことがわかる。

以上、文書原本調査データのＡ表・Ｂ表のうち、数値データについて３階層ランクにその件数を集計し、その時代的変遷を考えてみた。そこにおいて、際立っているのは、あらゆる点で室町期が画期となっていることである。厚手の文書から薄手のものへ、凸凹の文書から平滑なものへ、天地の丈の高い文書から低めのものへ、左右の巾の広い文書から短いものへ、概して面積の大きい文書から比較的小さいものへ、単位体積当たりの重さは重い文書から軽いものへ、の変化が見られるのは、室町期であった。そしてこれらに対応して、簀のヒゴが細く本数が多くなり、糸目の巾が狭くなったのも室町期であった。これらのデータは、室町期こそ紙の抄造技術の大改革の時期であったことを知らして呉れるであろう。おそらく、これは室町期に最も盛行した「杉原紙」との関連なしでは考えられないであろう。

２）紙に関する日記記事データ

第Ⅱ章の５節「文献史料調査」および６節「データのコンピュータ入力」において報告したように、奈良国立文化財研究所では紙に関する日記記事の収集とそのコンピュータ入力を分担した。そこでは、兵範記・中右記・長秋記・台記・同別記・台記抄・台記補遺・小右記・山槐記・公衡公記・同別記・人車記要目・貞信公記・九暦抄・九条殿記・九暦記・九暦逸文・宇槐記抄・御堂関白記等の平安時代の日記を主とした文献について、史料の探索を行い、 2,770件の紙に関するデータを採取したところである。

これらは、まだ完成したものではないけれども、その１部を史料編に紹介しておきたい。この日記記事データのコンピュータ入力の項目定義は、６節「データのコンピュータ入力」に紹介した「和漢紙文献類聚」古代・中世編データの項目定義（表４参照）とほぼ同じである。しかし、１件のデータのうち、その項目を全て掲載していたのでは、最も大事な史料本文の１行の表示巾がかなりに狭くなり、その行数が異常に膨らんでしまう恐れがある。

そこで、１件のデータについて「史料名」「和年号」「月日」「史料本文」「刊本」「巻冊」「頁」の７項目に限って紹介することにした。「月日」は５桁の数字で示すが、初めの２桁が月、次の１桁が「０」ならば正の月、「５」ならば閏の月を表わす。最後の２桁は日を示す。「巻冊」「頁」は、史料本文が掲載されている刊本の巻冊次および頁を示している。

また、データ件数は 2,770件であるが、これも全て載せるのは大変煩わしい。そこで、今回の調査に関係深い文書料紙の名称を選んで打出すこととした。今回選んで掲載するものは以下の通りである。

ａ．麻紙
ｂ．檀紙・陸奥紙
ｃ．厚紙・薄様

これらの記事から窺えることについては、第Ⅲ章の（研究報告９）富田正弘「古代中世における文書料紙の変遷－文献にみる紙の名称に関する考察－」に若干触れてある。

３）「和漢紙文献類聚」古代・中世編データ

第Ⅱ章の５節「文献史料調査」および６節「データのコンピュータ入力」において報告したように、富山大学では関義城氏編纂の「和漢紙文献類聚」古代・中世編のうち「日本の文献」の全文をコンピュータに入力した。このデータの総件数は、 2,783件にのぼるが、その１部についても史料編に紹介しておきたい。

このデータのコンピュータ入力の項目定義は、同章６節に述べたとおりであるが、１件のデータにつき全部で13項目あった（表４参照）。その13項目全部を打出すと、１件のデータのうち、最も大事な史料本文の１行の表示巾がかなりに狭くなり、その行数が異常に膨らんでしまう恐れがある。そこで、１件のデータについて「史料名」「巻冊」「頁」「和年号」「史料本文」の５項目に限って紹介することにした。

また、データ件数は 2,783件であるが、これも全て載せるのは大変煩わしい。そこで、今回の調査に関係深い文書料紙の名称を選んで打出すこととした。今回選んで掲載するものは以下の通りである。

ａ．麻紙
ｂ．檀紙・陸奥紙
ｃ．引合
ｄ．杉原紙
ｅ．奉書紙
ｆ．斐紙・鳥の子
ｇ．厚様・薄様

これらの記事から窺えることについては、第Ⅲ章の（研究報告９）富田正弘「古代中世における文書料紙の変遷－文献にみる紙の名称に関する考察－」で考察した。

４）和紙に関する文献目録データ

第Ⅱ章の５節「文献史料調査」および６節「データのコンピュータ入力」において報告したように、富山大学では財団法人製紙記念館が昭和27年に作成した和紙に関する文献の目録（ 490件）をコンピュータに入力した。今後も、これに独自に調査した文献を追加していく予定であるが、ここに掲載してあるものだけでも、今後の文書料紙の調査研究にいろいろ参考としていかねばならない文献が少なくない。その便を図るため、この目録を発行年順に並べ換え、史料編に紹介しておきたい。

なお、この１件のデータの項目は、書名・編著者・刊行年月・刊行地・発行所・頁数・縦寸・装丁の順である。「縦寸」は縦の寸法で、単位はcmである。